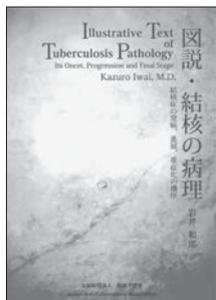


書評『図説・結核の病理』（岩井和郎著）



独立行政法人国立病院機構

千葉東病院 院長 山岸 文雄



A4判・カラー・頁180
英語対訳・CD-ROM付
定価5,250円（税込）
結核予防会発行
ISBN978-4-87451-282-1

公益財団法人結核予防会結核研究所名誉所長の岩井和郎先生の御執筆による、『図説・結核の病理』が2012年11月に公益財団法人結核予防会から出版された。解説を含めてすべて日本語と英語の併記がされており、また病理写真集のCDも添えてある。岩井先生は長年、結核研究所で病理の立場から結核病学に携わって研究を続けられており、結核および呼吸器疾患に関する我が国を代表する病理学者である。

序文で結核予防会顧問の島尾忠男先生および、前書きとして岩井先生がお書きになっているように、この本は化学療法のなかった時代に結核症で亡くなった患者さんの剖検臓器の病理所見を、図説としてまとめられたものである。現在の我が国で、化学療法とは全く無縁の自然経過を辿った剖検例を一括して示すことはまず不可能であり、大変貴重なものである。

私の勤務している病院に、かつて北鍊平先生の御息子が神経内科医として勤務していた際、北先生の『肺結核の臨床病理』（昭和28年）をいただいた。その序文で、発刊された当時の結核研究所所長であった隈部英雄先生は、「結核症の病理解剖は、結核病学の進歩に必要欠くべからざる基本的研究であり、ことがらがすべて終わってしまった所から、逆にその始まりに向かって考えを推し進めていく方法であり、その推理にしたがって形態学的、組織学的に系統づける分離方法であると言えよう」と述べている。結核患者の病理解剖は、結核症の発病様式の解明に多大の貢献をしてきているのは衆知の如くであり、岡治道先生の初期変化群に関する病理学的研究から、初感染発病学説が生

まれている。この本に収められている写真はすべてカラーで鮮明であり、A4の用紙一杯に大きく写されて、高度に進展した病変が結核患者の悲惨さを訴えるように語りかけてくる。副題の『結核症の発病、進展、重症化の機序』も、この本の内容を端的に表している

第I章は結核病理の基礎知識であり、結核菌に関する生化学、遺伝子について、また結核菌に対する生体の免疫反応、および結核病巣の形成とその生涯での進展形式について、わかりやすく、また最近の知見も加えて解説している。

第II章は結核症の病理形態学についてであり、結核初感染とこれに続く病変として初期変化群と早期蔓延型結核が、次いで二次結核症が呈示されている。化学療法のなかった時代の剖検例であるので、極めて高度に進展した肺結核病変であり、また現在では殆ど見る機会のない脾結核、副腎結核、腎結核、脳結核などの肺外結核の高度に進展した病変も示されている。

ところで、この文章を書きながら化学療法のない時代の剖検は、今のようにN-95のマスクもないし、剖検室の換気も十分ではない中で、結核感染対策はどのようにしていたのだろうかという思いが、ふと頭に浮かんだ。まだPZAを含むレジメンが標準治療となっていない、昭和の終わり頃の結核病棟での勤務経験が思い出された。当時、医療従事者の結核院内感染対策は十分ではなく、看護師および結核菌を担当する検査技師は、分厚いガーゼマスクをして予防衣を着ていた。そして、これらの職員の中から、数年に1人は結核を発病していたと記憶している。治療薬のない当時の剖検に携わった方の中からも結核発病者がいたかもしれないと思うと、この貴重なデータをおまとめいただいた、岩井先生を始め、結核研究所の病理検査科の職員の御尽力に敬意を表したい。そして結核医療や研究にかかわる医師や検査技師の方々の出来るだけ多くの方に、是非お読みいただきたい、推薦したい1冊である。